

県内主要古墳群の調査 II

— 戸場口山古墳範囲確認調査 —

駒宮史朗

はじめに

さきたま資料館では昭和43年の開館以来、史跡埼玉古墳群の整備を計画的に進めており、これまで稲荷山古墳をはじめとする一連の調査を通して、埼玉古墳群の内容も徐々に解明されつつある。

この間、県内の古墳調査も各地で行われ、成果を得て古墳文化の研究も一段と進展をみている。このような状況下、埼玉古墳群形成の過程が多方面の角度から検討されているが、資料不足の感もあって必ずしも十分なものとは言えず、また、全国的な視点にたった埼玉古墳群の位置づけを考える必要がある。

このため、さきたま資料館では「埼玉古墳群とその周辺の調査によって得られた古墳時代の考古資料の収集、保管、調査、研究を行い、古墳群の解明に努め、その展示を通じて埼玉の古代について利用者の一層の理解を深める」という当館の運営方針に添い、昭和61年度から県内主要古墳調査という新事業を開始した。

この新事業は、これまで行田市真名板所在高山古墳（前方後円墳）同市長野所在白山古墳（円墳）、花園町黒田所在黒田2号墳（前方後円墳）同12、16号墳（円墳）の墳丘測量を実施している。その他、関連調査として二子山古墳出土埴輪の重鉍物分析、併せて杉戸町目沼古墳群、春日部市塚内古墳の現況調査を行った。たの成果は、調査研究報告第1号に報告され、古墳研究上の基礎資料として活用を図っている。

ところで、埼玉古墳群の所在する埼玉地区には「百塚」の地名が残るほど、かつては多くの古墳が存在していたが、今日では数カ所にその痕跡をとどめるのみで、そのほとんどが何らかの理由で削平され、失われてしまった。

そこで、まず身近なところから、埼玉古墳群周辺に所在する古墳に焦点をあて、古地図や地籍図、あるいは古老からの聞き取り調査などの方法によって古墳群の分布を復原し、埼玉古墳群本来の姿を浮き彫りにし、古墳群の正しいイメージを把握することが必要と思われるのである。

このような観点から、埼玉古墳群の中で存在は知られているが、内容の不明な古墳に的をしばり、古墳群形成解明のわずかな糸口でも探り出すため、その対象として今年度は戸場口山古墳の調査を実施することにした。

調査にあたっては、本調査の主旨を御理解いただき、調査の御承諾をいただきました地権者の福島文雄氏をはじめとし、大野源一、塚田角男、渋谷契昇、大谷徹、太田博之の各氏及び行田市教育



第1図 古墳の位置

委員会の御協力・御教示をいただきました。また、県立自然博物館の本間岳史氏には石材の鑑定をお願いいたしました。御芳名を記して御礼を申し上げます。

I. 戸場口山古墳の立地

戸場口山古墳が所在する行田市埼玉は、国指定史跡埼玉古墳群をはじめとし、数多くの古墳が分布し関東地方でも有数の古墳群地帯として、つとに著名である。

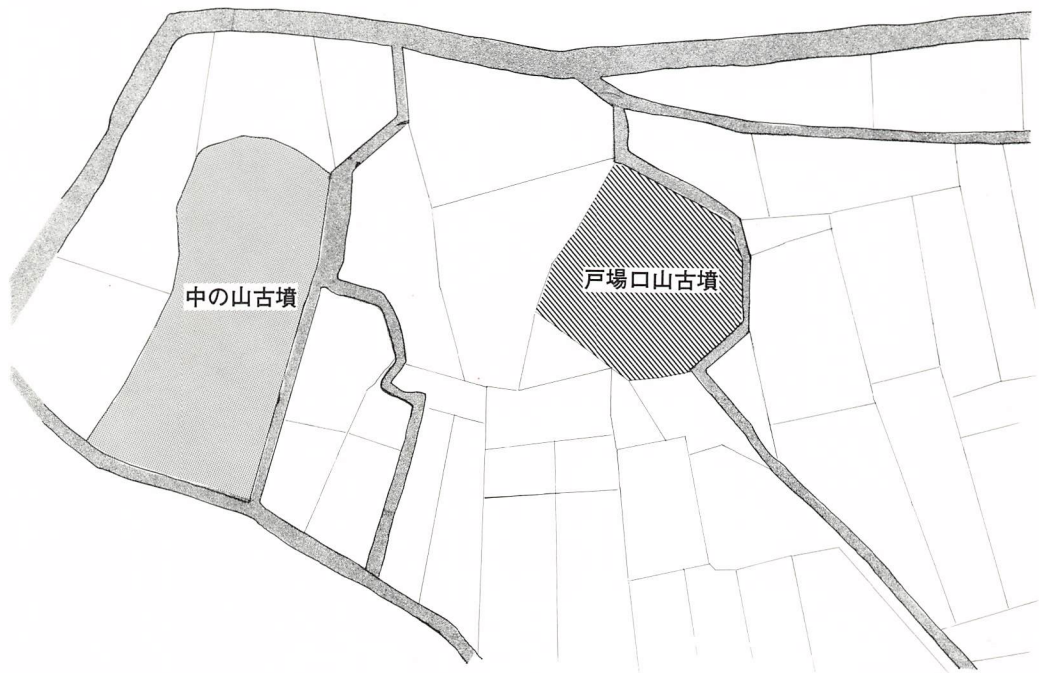
この地域は荒川と利根川の両大河に挟まれた低地帯である。低地帯の中には大宮市から北に細長く伸び出した北足立台地の先端部が達し、また関東造盆地運動によって地盤の沈降を生じた洪積ローム台地が細長くいく条にも発達している。これらの台地は利根川、荒川の氾濫や侵蝕を受け各所で分断され、島状に自然堤防状の高まりを残している。

古墳群はかつての台地が沈降した埋没ローム台地の上に築造されているものであり、これまでの埼玉古墳群の調査からも、古墳の旧地表下にはロームの存在が確認され、明らかとなっている。

II. 文献にあらわれた戸場口山古墳

戸場口山古墳は古くから知られていたらしく、新編武蔵国風土記稿忍領渡柳の項に「……戸場口ト呼塚アリ此塚ノ中ヨリ近キ頃石棺ヲ掘出セリ其中ニ九尺程ノ野太刀アリ今村内本性寺ニ納メ置リ土人ノ話ニコハ當所ニ住セシ渡柳彌五郎トイヘル人ヲ葬タル塚ナラントイヘリ云々」と記されている。

文中で、石棺の中から出土したとされている野太刀は、本性寺に納めたとされているが、現存は



第2図 古い地籍図にあらわれた戸場口山古墳

していない。また長さ9尺（297cm）という寸法は、太刀としてはケタはずれの大ききで、いささか現実味を欠く記述であるが、いずれにしても太刀の出土したことが判る。

戸場口山古墳の周辺は、区画整理や道路の付替えなどによって地形が大きく変わっている。古い地籍図にしるされた戸場口山古墳は、ほぼ東西南北に偏を有して、東西が直線的で、南は丸味を持ってふくらみ全体的にはD字形を呈している。南には細い道路が古墳に添ってまわり、古地図からみると、方墳のようでもあり、南の裾が丸くなるところから円墳のようにも見受けられる。

また、一部には前方後円墳であったという話しも伝わっているが、定かではない。^{*1)}

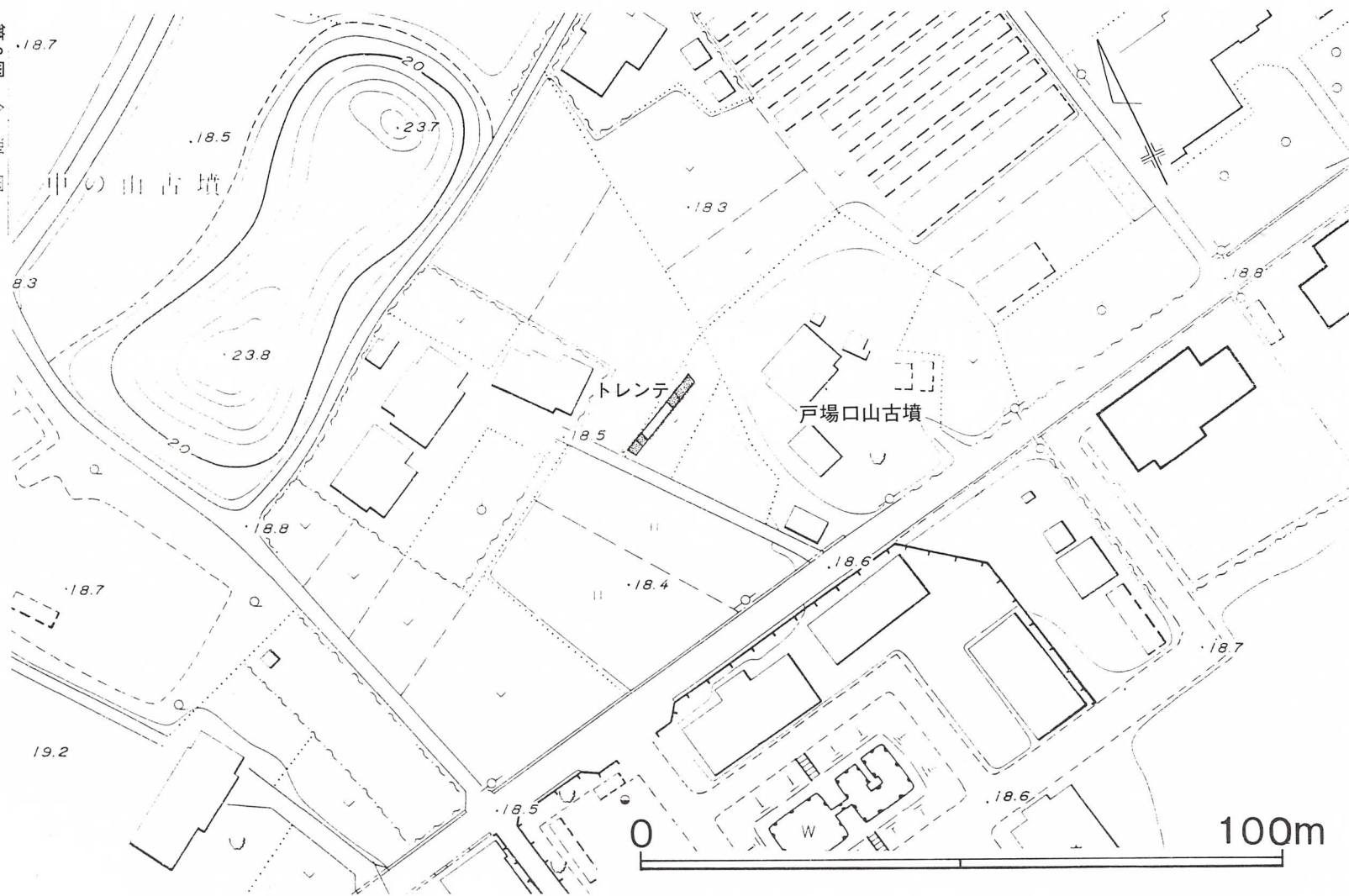
現存する墳形は宅地化され、当初のものとは大きく異なると思われるが、墳丘の規模は東西38m南北40mを測り、四隅はやや丸くなっているが、全体的には隅丸の正方形に近い墳形をしている。

宅地となっている墳丘部分は、周囲の畑より約1m程高くなって、古墳としての高まりをかるうじて確認できるだけである。

Ⅲ. 記憶に残った戸場口山古墳

現在、戸場口山古墳上に建つ家の塚田角男氏によると、戸場口山古墳の土取りが行われたのは、大正年間の頃といわれているが、土取りは一度に行われたものではないらしく、部分的に2階建ての物置のヒサシの高さまで山が残っていたという話が伝わっているところから、4m程の高さに盛土が残っていた所があったと思われる。

これらの土取りは周辺の沼の埋め立てに用いられ、多くの古墳がこの種の土取りによって消滅し



ている。稲荷山古墳の前方部しかりである。平地で適当な埋め土が無いこの付近は、古墳が狙われ戸場口山古墳も同じ運命をたどったのである。

この土取り工事中に石が掘り出されたという話が伝わっており、その石の大きさは畳2～3枚分の広さがあり、子供の頃、石の上に乗って遊んだという人の言もある。

さらに塚田氏宅では、ワラ打ちの作業台として使用していたが、大きな石のため庭に置いては、じゃまになるので、植木屋を頼んで、石のほしい家へ運んだことがあったそうである。

そのうちの一人、埼玉在住の田中正次氏の家では、運んできた石をしばらく庭石として置いていたが、庭を作り替えたその時に、どの石が戸場口山古墳の石かわからなくなってしまったそうである。

現在する唯一確実な石は、塚田氏宅に残されている加工痕の残る石（写真8）であるおそらくその大きさから石室の壁石として使用されたものと推定される。こうして、いくつかの話を総合すると、墳丘は少なくとも4m以上の高さがあったのではなかろうか。そして封土の中から子供が何人も乗って遊べる程の大きな石が掘り出されている。この大きさから見ておそらくは横穴式石室に架工された天井石かと思われる。そして石室の壁石としては方形に面取り加工が施された石が使用されていたのであろう。

IV. トレンチの調査

調査は、墳丘の西側の畑地に、幅1.5m、長さ15mのトレンチ1本を設定した。設定位置は畑の区割りの関係で古墳の軸に対し若干のズレを生じている。

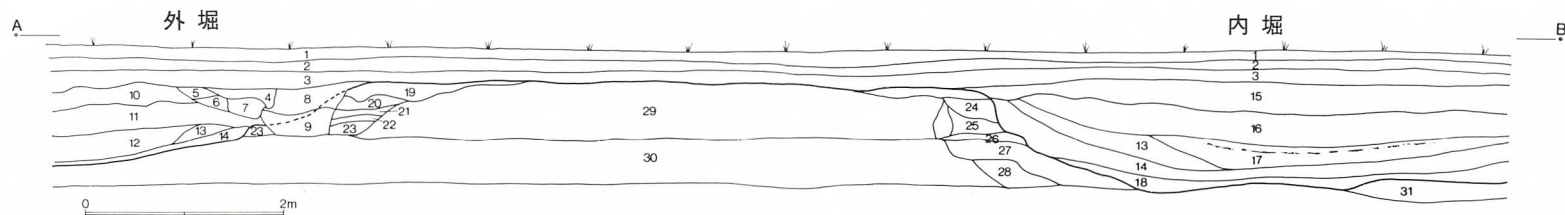
トレンチ調査の結果、内堀と外堀が検出され、戸場口山古墳は二重の堀を備えた古墳であることが確認された。

内堀と外堀の間には中堤帯が設けられている。中堤を構築する土層は、第30層の黒褐色土とその上に堆積する29層から成っている。29層中には全体にパミスが含まれ、5～10mmのロームブロック粒が混入していることから、人工的な盛土と考えられる。さらに、29層の上に盛土が行われていたかどうかは不明であるが、現存する周堤の規模は上部で6.5m、下部で7m、内堀の底部からは高さ1mを測る。

また、周堤は構築には版築の工法が採用されている。周堤の両立ち上がり部分、つまり内堀の外側立ち上がり部分と、外堀の内側立ち上がり部分には、盛り方の整形と、土の流出やくずれ防止の効果をねらい、ロームを含む土と、粘性の強い土を交互に積み上げ硬く築き固めている。

内堀は全体の約 $\frac{2}{3}$ 程が検出された。おそらく墳丘立ち上がりまでは約1.5mが見込まれ、推定約7mの幅を有する内堀となろう。深さは現地表から1.5mである。周堀内に堆積する17層中には、厚さ3～4mmで薄く帯状に堆積したパミス層が認められた。このパミス層は瓦塚古墳の調査でも周溝内から検出され、浅間Bスコリア（天仁元年＝1108年）とされるもので、平安時代の中頃には周堀は底から30cm程が埋まっていたこととなり、比較的周堀の形状をとどめていたと思われる。

外堀は、内側の立ち上がり部分に、後世の溝状の攪乱が入り、立ち上がり状態が不明であるが、基本的層序は内堀と同じく版築整形が行われていることが判る。外堀は内堀にくらべ立ち上がりは



第4図 トレンチ土層図

1	表土	
2	にぶい黄褐色土 (10Y R4/3)	ローム粒子 (φ 1~5mm) 及び白色パミス (φ 1~2mm) をまんべんなく含み、黒褐色土粒子 (φ 2mm±) を少量、炭化物ブロック (φ 2~7mm) をごく微量含む、粘性欠、しまり極めて強。
3	褐色土 (10Y R4/4)	ローム粒子 (φ 1~5mm) 及び白色パミス (φ 1~2mm) をまんべんなく含む。粘性欠、しまり強。
4	にぶい黄褐色土 (10Y R4/3)	ローム粒子 (φ 1mm±) を少量含む。粘性中、しまりやや弱。
5	褐色土 (10Y R4/6)	ローム粒子 (φ 1mm±) を多量に含む。粘性中、しまりやや弱。
6	〃 (〃)	ローム粒子 (φ 1mm±) を多量に、黒褐色土ブロック (φ 20~5mm) 少量含む。黒褐色土ブロックは上位の方がより大きい。粘性中、しまり中。
7	灰黄褐色土 (10Y R4/2)	ローム粒子 (φ 1~5mm) 及び黒褐色土ブロック (φ 5mm±) をまんべんなく含み、白色パミス (φ 1~2mm) を微量含む。粘性中、しまり強。
8	〃 (〃)	ローム粒子 (φ 1~7mm) を多量に、黒褐色土ブロック (φ 15~5mm) を少量含む。9層の境界近くに焼土粒子 (φ 2mm±) を微量含む。粘性中、しまりやや弱。
9	〃 (〃)	8層に較べやや白味を帯びる。ローム粒子 (φ 1~5mm) を多量に、黒褐色土ブロック (φ 15~5mm) を少量含む。中央上位はやや赤味を帯び粘性弱、しまり弱。その他は粘性中、しまりやや強。
10	暗褐色土 (10Y R3/4)	ロームブロック (φ 10mm±) を微量、ローム粒子 (φ 1~2mm) を大量に、黒褐色土ブロック (φ 3mm±) を少量含む。粘性弱、しまり弱。
11	〃 (10Y R3/3)	ローム粒子 (φ 1~5mm)、黒褐色土ブロック (φ 5~50mm)、灰褐色粘性土ブロック (φ 10~50mm) をいずれも多量に含み、全体にまだら状を呈す。粘性中、しまり中。
12	黒褐色土 (10Y R2/2)	暗褐色土ブロック (φ 10~50mm) を多量に含み、暗褐色ブロック中にはローム粒子 (φ 1~5mm) を多量に含む。粘性強、しまり中。
13	暗灰黄色土 (2.5Y 4/2)	ローム粒子 (φ 1~5mm) を大量に含む。粘性強、しまり中。
14	灰オリブ色土 (5Y 4/2)	ローム粒子 (φ 1~5mm) を大量に含む。中堤版築土の青ネバ土の溶出土を含み全体に灰色味が強く、赤味に欠ける。粘性強、しまり中。
15	暗褐色土 (10Y R3/4)	ローム粒子 (φ 1~2mm) を多量に、白色パミス (φ 1~2mm)、黒褐色土ブロック (φ 5mm±) を少量含む。粘性中、しまり中。
16	暗褐色土 (10Y R3/3)	ローム粒子 (φ 1~3mm) を少多、白色パミス (φ 1~2mm) をごく微量含む。粘性中、しまり中。
17	黒褐色土 (10Y R2/1)	極めて微細な白色粒子 (φ 0.5mm以下) を微量含む以外に含有物なし。粘性強、しまりやや強。中位やや上方にパミスの可能性のある砂層が断続的に認められる。粘性強、しまりやや強。
18	暗褐色土 (10Y R3/3)	ローム粒子 (φ 1mm以下) を大量に含む。部分的に鮮黄色ローム、青灰色粘土が薄く堆積する。粘性強、しまりやや強。
19	褐色土 (7.5Y R4/3)	ローム粒子 (φ 1~3mm) を大量に含む。粘性欠、しまり欠。
20	黄褐色土 (10Y R5/6)	暗褐色土ブロック (φ 20~30mm) を多量に含む。粘性欠、しまり欠。
21	にぶい黄褐色土 (10Y R5/4)	赤褐色土粒子 (φ 2mm±) を少量含む。粘性欠、しまりやや強。
22	褐色土 (10Y R4/4)	ロームブロック (φ 20~30mm)、灰褐色粘質土ブロック (φ 20mm±)、黒褐色土ブロック (5mm±) を多量に含みまだら状を呈する。粘性中、しまりやや強。
23	暗褐色土 (10Y R3/4)	ロームブロック (φ 10mm±)、黒褐色土ブロック (φ 10~20mm) を多量に含む。粘性やや強、しまり強。
24	褐色土 (10Y R4/4)	ロームブロック (φ 20~50mm)、黒褐色土ブロック (φ 30mm±) を多量に含む。粘性欠、しまり欠。
25	黄褐色土 (10Y R5/0)	ほぼ純粋なロームにより形成されるが、硬軟のブロックが混合されている。粘性中、しまり中。
26	褐灰色土 (10Y R6/1)	褐色土粒子 (φ 1mm±) を少量含む以外ほぼ純粋で粘土質。所謂青ネバ土。粘性きわめて強、しまり強。
27	暗褐色土 (10Y R3/3)	ロームブロック (φ 10~30mm)、黒褐色土ブロック (φ 20~50mm) を多量に含む。粘性中、しまり弱。
28	〃 (〃)	素地は27層と同様であるが、ロームブロック (φ 10~20mm)、黒褐色土ブロック (φ 10~80mm) をも相対的に大型である。
29	褐色土 (10Y R4/4)	ロームブロック (10~50mm) を多量に、白色パミスを少量ではあるが均等に含む。粘性弱、しまりきわめて強。
30	黒褐色土 (10Y R3/3)	白色微粒子を微量含む以外ほぼ純粋。粘性強、しまりやや強。
31	暗褐色土 (10Y R3/3)	ロームブロック (φ 10~50mm) を多量に含む。粘性やや強、しまり欠。

ゆるく、掘り込みも浅いものとなっている。土層の堆積状態から、堀幅は内堀と同規模程度となりそうである。

V. 出土遺物 (第5図)

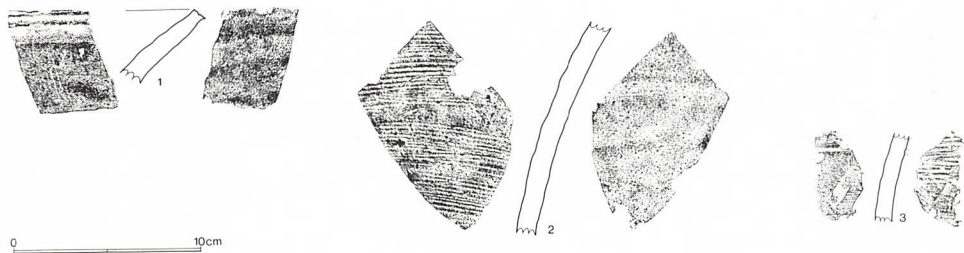
トレンチ内からは図示した須恵器片3点の他、磨滅した土師器の小破片3点、磨製石斧1点、近世の陶磁器及び緑泥片岩の碎片が出土している。土師器は小破片のため実測は不可能で割合し、ここでは古墳と直接関係があると思われる須恵器のみを図示した。

①は口縁部の破片で、口唇はコの字となり下端は引き出され鋭く突出した稜を作る。口唇部の中央はM形にくぼむ。外面は荒いタテのハケ調整の上から横ナデを、内面にも横ナデを行っている。内面暗灰色、胎土、焼成とも良好である。

②は口縁部の破片である。外面にはカキ目調整、内面は横ナデ調整が行われ、降灰により器面がザラついている。色調は暗灰色で焼成は良好。

③は酸化炎焼成され、レンガ色を呈しているが焼きは固い。口縁部の破片で外面は横ナデされ両側を沈線で囲むことによって作り出された幅6mmの疑似凸帯が付されている。内面にはカキ目調整が見られる。

これら須恵器の特徴は、中の山古墳出土のいわゆる須恵質埴輪と共通するものである。特に③は中の山古墳出土の例から朝顔形の須恵質埴輪となるもので、形骸化した凸帯ながら埴輪としての要素を備えている。



第5図 出土遺物拓影図

VI. 石材 (写真4・8)

現存する石は36×37×24の大きさに加工されている。表面に加工時の幅5cmの工具痕が残る。他は小破片となっている。石質は凝灰質砂岩ある。この石は比企丘陵の滑川町や嵐山町周辺の第三紀層中に形成されており、軟らかいため加工しやすく、荒川左岸の中流域や比企丘陵の後期古墳の横穴式石室に多用されているものである。

VII. まとめ

今回の調査は、わずか1本のトレンチによる周堀の確認調査であったが、極めて大きな成果を得ることができた。これまで古文獻から、かつて石棺の中から大刀が出土したことぐらいしか判らなかったが、実は二重の周堀を有する古墳であることが判明した。

この二重の周堀はさきたま古墳群の中では、円墳の丸墓山古墳及び奥の山古墳以外の7基の古墳に採用され、そして長方形にめぐること特徴の一つである。二重周堀の形態を保有することを、古墳群の形成開始当初から築造の重要な規範としている。

古墳群の中で、今までの調査結果により、最も新しい時期の築造と見られるのが中の山古墳である。中の山古墳は埴輪が消滅する頃の築造と推定されるが、埴輪に替わり須恵器技法で作られた須恵質埴輪壺が樹立されており、6世紀末～7世紀初頭に築造された古墳と考えられる。^{*2)} 須恵質埴輪壺は戸場口山古墳からも出土しているが、内堀の覆土中からの出土であるため、はたして戸場口山古墳に伴うものであるのか、あるいは隣接した中の山古墳から流入したものであるのか疑問であるが、埴輪が消滅した後に須恵器技法で埴輪を作りその機能を代用したとすれば、中の山古墳に後続する古墳として、築造の時期をとらえることができよう。

埼玉古墳群の形成は、北方から築造が開始され、南に下るに従って新しくなる傾向が伺えるが、戸場口山古墳は古墳群の最も南に位置している。

検出された周堀の形は、確認された周堀はトレンチ幅 1.5mの範囲であったが、直線的な辺を示しており、方墳の可能性も捨て切れない。あるいは前方後円墳であるならば、前方部の周堀に相当する部分であろう。

大型前方後円墳から大型方墳への転換は、群馬県総社古墳群、千葉県板付古墳群^{*3)} の如く、7世紀初頭に見られ、畿内においても、この頃を境に、有力氏族の墓には大形の方墳が築造されてくることが確認されている^{*4)}。

戸場口山古墳が方墳であったとすればさきたま古墳群も、それら社会の動向と軌を一にし、中の山古墳から戸場口山古墳の段階で大きな転換を迎えたことになろう。

外堀を含めておおよそ75m前後の規模は、古墳群の終焉を飾るにふさわしいものと言えるのではないだろうか。

以上限られた資料から、多分の予察を含め、戸場口山古墳の性格を考えてみると興味ある問題が提示されるが、今回は戸場口山古墳が方墳となる可能性を指摘するにとどめ、今後の調査に研究の活路を委ねたい。

【註】

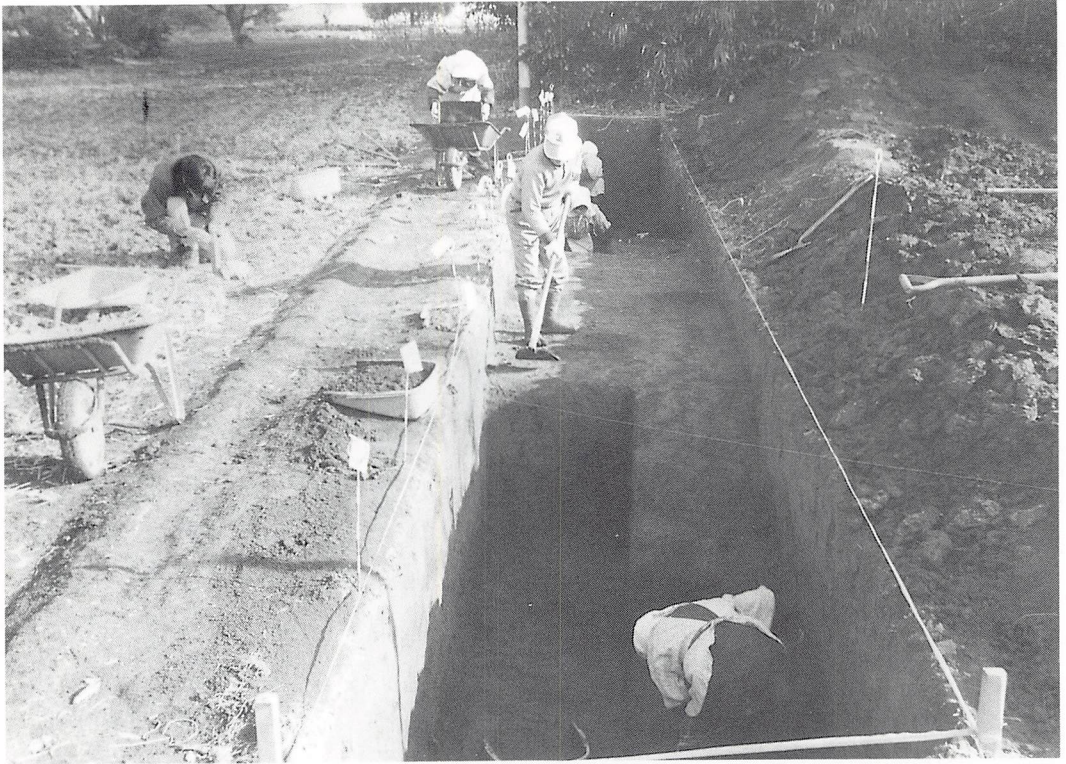
- * 1 「埼玉 稲荷山古墳」埼玉県教育委員会 1980。
- * 2 若松良一 「中の山古墳の調査」第21回遺跡調査発表会要旨 埼玉考古学会他 1988。
- * 3 白石太一郎・杉山晋作 「千葉県成東郡駄ノ塚古墳の調査」日本考古学協会第53回総会研究発表要旨 1986。
- * 4 白石太一郎 「畿内における古墳の終末」国立歴史民族博物館研究報告第1集 国立歴史民族博物館 1982。



1 中の山古墳 後円部墳頂から



2 西側から



3 トレンチの調査状況



4 古墳出土の石材



5 内堀の土層推積状態



6 内堀の立上がり状態



7 外堀の立上がりと周堤の断面



8 石材についていた工具の痕